
感染

kiskfragment

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

感染

【Nコード】

N5027Z

【作者名】

kiskfragment

【あらすじ】

100%人を死に追いやるウイルスに感染した男。残り15分の地味な人生。

致死率100%のウイルスに感染した。

感染源はタオル。昨日友人が家に泊まって風呂上がり洗面所で顔を洗っていた。彼はタオルで顔を拭き、その直後自分も顔を洗ってそれで拭いた。このウイルスは唾液など体中の粘液に潜んでいる。友人が顔を拭いた時にタオルに唾液がついてそこから感染したのだらう。

ちなみに友人はもう死んだ。俺の目の前で口と鼻から血を滝のように垂らしながら死んだ。

救急車を呼んだ俺はそこで初めて彼がウイルスにかかっていたことを知った。救急隊員に念のためウイルスの検査を勧められた。

案の定陽性。俺の寿命はあと15分弱。もし感染していることを知らなければ、自分は残りの5時間を無意味に過ごしていたらだらう。このウイルス、厄介なことに初期症状がない。感染して約25時間後には体中にウイルスは増殖、その5時間後にまるで体内が破裂したように鼻口から大量の血を流して死ぬ。一種の時限爆弾のようなものだった。

6時間前それを知った俺の顔はどんなことになっていただろうか。驚愕と恐怖と汗と涙に溢れた、顔といつても顔の原形をとどめていない顔だったと思う。

今自分の目の前にあるのはルービックキューブ。残りの15:12分が、自分の頭と手を動かすだけ動かしてみる。俺があとちよつとで死ぬことは誰にも伝えていない。もちろん親にも。

俺は一人で死のうと思う。何故そう思うのかはわからない、でもそう思う。それは一生の後悔になるだらう。でもその後悔は永遠に忘れず、死んでも覚え続けるだらう。誰の存在も忘れることはできない。

残り10分を切った。担当の医師が自分の隔離病室に入ってきた。

全身には感染防止と思われる蟻一つ入れなさそうな白い防護服を着ている。背中には酸素ボンベのようなものが取り付けられており、彼が呼吸するたびにシューシューと音を立てていた。一見大げさに見えるかもしれないが、相手にしているのは感染すると絶対に死ぬウイルス。そこまでするのも当然だろう。

彼は俺の隣に来て、最後に家族や友人に伝えたいことはあるかと尋ねた。

伝えたいこと。率直に言えば、遺言ってわけか。

時計の針を見る。残り約8分。

俺は医師に伝えることは何もないといった。医師はとても驚いた様子だったが、患者の意思が最優先と思ったのか笑顔でわかりました、と言った。

ルービックキューブ。なんとなく廻し続けていたカラフルな立方体。どうやら自分はこの一生で全面そろえることはできなかったらしい。

俺は自分の頭と手の活動を休めるように命令した。手からルービックキューブがこぼれおちる。ストンとベッドのシーツに倒れこんだ自分の手、今までよく働いてくれた。感謝している。最後に言おうお疲れ様。

残り2分。

医師はそろそろですね、といった。自分はそうですねとにこやかに返した。

だんだん心臓がドクドクドクドクと鼓動を速めている。体中を伝う血液。その中に潜むウイルス。彼らは少しずつ活動を始めた。そして、

激痛。口から大量の血が噴き出す。

予定より1分早く、俺は息を引き取った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5027z/>

感染

2011年12月17日00時57分発行